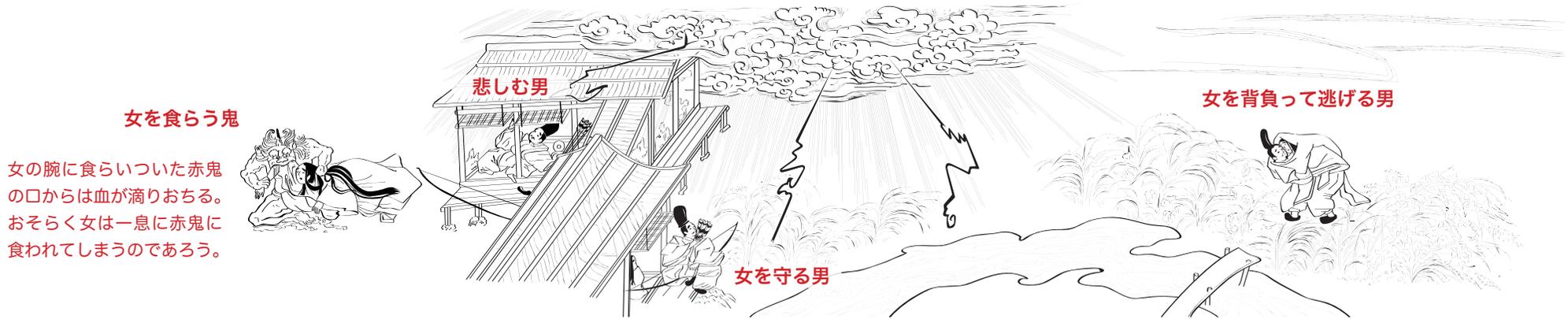


『伊勢物語絵巻』

絵巻などの巻子本は、左手で開き、右手で巻き取りながら、右から左に描かれる場面を見ていくのが基本である。



女の腕に食らいついた赤鬼の口からは血が滴りおちる。おそらく女は一息に赤鬼に食われてしまうのであろう。

《女が鬼に食われたことを悲しむ場面》

角度の変わった「あばらなる蔵」の中で、倒れて足ずり（足摺）をする男の姿が描かれている。弓と男の沓とが散乱して、男の悲しみを表している。「足摺」とは、このように悲しみのあまり、倒れたまま足を空に上げて両足をすりつける動作をいう。悲しみを表す動作であるが、招魂の動作であるとも。鬼に食われた女の魂を呼んでいるのか。倒れた男の傍には、予備の弓糸を巻いておく弦巻が落ちている。

《雷の鳴る中、弓を持って女を守る場面》

空には雷雲が立ち込め、二筋の稲妻が走る。男は弓を持ち胡縁を背負って蔵の前で守る男。奥には雷を恐がる女の姿が見える。

《女を背負って芥川のほとりを行く場面》

盗み出された女であったが、男に顔を近づけ腕を回す姿からは、男を思う女の気持ちが想像される。男も女を思って振り返っている。芥川のほとりには花を付ける草木が生え、そこに多くの露が置いている。

この絵巻作者は、女つまり藤原高子が兄たちに救出されたという説明的な文章には興味がなく、上記の場面で完結させている。